

# 第 13 回 研 究 大 会 報 告

1994年2月11日（金）・12日（土）に、本会の第13回大会が筑波研修センターにおいて、多数の会員を集めて開催された。11日に行われた篠原昭雄先生と別府淳夫先生の講演の要旨と、12日に行われた自由研究発表の内容は以下の通りである。

○ 講 演〈要旨〉（11日 14：00～16：40）

## 私 の 社 会 科 教 育 研 究

篠 原 昭 雄（教育学系）

今回のテーマは「私の社会科教育研究」となっているが、私の場合様々な要因により、社会科教育学研究は自発的というよりも“やらざるをえなかった”という感じがする。

社会科教育は、理論的な研究（目標論・性格論）が中心となるが、社会科教育史論・子ども論・教育課程論・授業論・教師教育論と6つの研究領域で構成される。しかし、それぞれに解決しなければならない問題がたくさんある。その中で、サイエンスは物事の間接的な関係を中心に究明していく鍵となるだろう。

社会科の中の地理はクリエイティブな性格をもっている。地理ではよく「窓方式」というが、これは地域の特色を見る場合一つの視点からではなく、多面的な見方が必要であることを表している。もちろんこれは社会科全般にいえることであり、異質なものの集まりである社会科を支えているものは、まさにそういったことなのである。またそういう力をつけ、総合的な社会認識を養うことが、人間形成に必要なのである。

最近社会科においては、国際化や社会の変化といった21世紀を目前として流動的な社会の中で、これからどうやって構築していくかが問題となっている。将来を見定めて、社会科が必要なのかどうかということは、それぞれの教科専門の先生方が“良い授業をつくる”という点で研究することが大切なのである。例えば社会科教育ならば、その中の構造のどの部分の研究なのかを明確にしておく必要がある。また、そういうことを研究するのにサイエンスの研究が是非欲しい。社会科教育学は、それぞれの研究が集大成されてやっと全体像を持つのである。

ある仮説を持って検証していくことが、社会科教育の中では大切なのである。将来を展望して、これからの社会科の意味を皆さんにも考えて欲しい。

以上は、篠原先生の講演テープからまとめたもので、聞き落とした箇所、聞き違えた箇所が多々あるかと思えます。先生のご講演の中身を充分にお伝えできないことを残念に思いながら、お詫び申し上げます。（久保京子\*）

\* 筑波大学大学院

# 儒 教 に 学 ぶ

別 府 淳 夫 (哲学・思想学系)

まず、私は当初、今回の講演では「倫理の授業を思う」というテーマで講演するつもりでしたが、諸事情により、勝手ながら上記のようなテーマで、また、「儒教と私」「20世紀の儒教」「儒教に何を学ぶか」という三つの部分に分けて講演したいと思います。

私が儒教の言葉に触れたのは子どもの頃、父親から「巧言色少なし仁」という「論語」の言葉を聞いたのがその始まりです。が、戦後の日本では儒教は軍国思想を支えた思想として遠ざけてしまい、私もその影響でか、どちらかといえば悪い先入観を東洋思想に抱き、西洋思想に多く興味を向けていた時期がありました。

儒教は20世紀の中国において、西洋思想の流入や文化大革命の影響を受け、一時その権威を失墜させますが、70年代後半に「批判すべきは批判し、継承すべきは継承する」という新しい儒教批判の姿勢が提唱されて以来、その状況は次第に改善されてきました。最近ではスポーツ選手の強化に儒教の倫理の長所を導入して、精神修養や人間関係の改善を行うという実践も行われていると聞いております。

私も38歳の時に「論語」と出会ってからそれに影響を受けるところが今でも大きく、特に「論語」の「人間らしくあること・物事の中庸を強調し、和を説く」という姿勢に共感し、講義のテキストとして用いるということもしてきました。このような儒教の思想は現代社会における人間関係の問題において、また教育の問題において、十分に生かす道があるように思われます。今後、私自身もこの信念に基づいて、「儒教の教育的な面における現代的意義」を探るという教育的なテーマと、また「倫理学における儒教の現代的意義」を探るという倫理的なテーマを設定して、儒教に取り組んで行きたいと思っています。

以上、別府先生の講演を録音したテープからまとめました。先生の講演の中身がどの程度お伝えできているか、誠に心許なく思っております。至らないところはすべて私の責に帰すべきものであり、御詫び申し上げますとともに御容赦のほど宜しくお願い申し上げます。(森 浩彰\*)

## ○ 自由研究発表 (12日 9:30~13:10)

今大会の自由研究発表は複数の分科会に分けずに、一つの会場で全発表を行う形式をとった。やや時間的な制約が気になったものの、有意義な討論が交わされたと感じている。

まずはMC 2年生の発表が5本。本郷美希子さんの「高等学校世界史における『両性史教育』」は現行教科書記述の量的分析をもとに「女男平等」理念の徹底を求めるもの。中切正人さんの「ファシズム理解を深めるシミュレーション教材の開発とその実証的研究—高等学校世界史における『アイヒマン実験』の導入—」はシミュレーションを取り入れた試行授業の緻密な計画

\* 筑波大学大学院

と分析に基づく実証研究。生徒は身近に「ファシズム体制」をとらえるようになる。平久江祐司さんの「フィリピンの国民的統合に果たす教育の役割—中等教育における価値教育を事例として—」は「多様性の中の統一」を追究するフィリピンの近年における価値教育の傾向を分析。山口泰宏さんの「地理教育における『地域変容』の教材開発—茨城県新治村の養豚業を事例として—」は「畜産インテグレーション」が進む中で新治村の養豚ベルトが消滅した事実をリアルに示し、大規模な企業的経営を求めることでしか畜産業の生き残る道はないのかと、参加者に問題を投げかけた。西沢泰啓さんの「中学校社会科における『郷土意識』育成の意義と方法—『小布施の生活と文化』をとおして—」は長野県小布施町の現地調査をもとに「郷土意識」を育成する学習指導計画づくりを追求したものである。

次いでDC2年生の発表が2本。井門正美さんの「歴史学習におけるロールプレイングの可能性と意義」は「長岡戊辰戦争」を教材にしたロールプレイング授業実践の分析。李明熙さんの「『追体験』的人物学習論の構想」はコリングウッドの歴史哲学から示唆を得た人物学習論の新構想への序論である。

最後に内地留学あるいはMCのOBである現職教員の発表が各2本。木村達人さんの「一人一人が意欲的に取り組む社会科学習指導の在り方—中学校地理的分野『身近な地域』の実践を通して—」と、山口喜玄さんの「児童のよさや可能性が生きる社会科学習指導—小学5年『公害と私たちの暮らし』の教材を通して—」である。どちらも21世紀の学習者像を念頭においた提案である。田村和浩さんの「地理教育における地図教育のありかたについて」と、天野真哉さんの「『米日地理教材開発プロジェクト』における教材開発の事例—観光単元学習—」はともに高校教育の立場から、基礎・基本に関すること、発展的な単元開発のことが話題提供された。

大人でも解答が容易には導き出せないような「問い」を意欲的に追求する授業とはどのようにして可能なのか。おそらく、「問い」への教師の主體的な追究が深ければ深いほどその確度は高まるであろう。養豚業の生き残る道を「農民的発展」として問い始めたという山口さんの言葉が印象的であった。（田村真広\*）

---

\* 筑波大学教育学系

〈研究会報告〉

## 第33回 例会 報告

1994年6月4日(土)に、本会の第33回例会がお茶の水女子大学附属高等学校において、多数の会員を集めて開催された。例会で行われた影山清四郎先生の講演と、中尾敏朗先生の実践報告の要旨は以下の通りである。

## 日韓歴史教育と社会科

影山清四郎\*

永野前法務大臣の「南京大虐殺」に関する発言後、新聞の投書欄にはその発言に関する意見が多数寄せられていた。その発言の多くは、「近隣諸国の歴史を若者に教えて」といった歴史教育の重要性を指摘したものであった。たしかにその通りであると思う。しかし、そこにはわたくしたち社会科教育研究者が立ち止まって考えるべきことが多々あると思う。

ある人は教科書検定によって歴史的事実が正しく伝えられないことを問題視するかも知れない。あるいは、教科書作成に携わっている方は一冊の教科書にすべての歴史的事実を盛りこむことができないというかもしれない。また、社会科ないしは「地理歴史」に歴史が入っているとの問題を指摘されるかもしれない。もっと深刻に言えば、こうした投書にたいして教師は歴史的事実をきちんと「教えたはず」なのだというかもしれない。

現在の教科書問題は「南京大虐殺」があったかなかったのか、その被害者数は数万人なのか20万人以上なのかといった検定による「歴史的事実」の歪曲をゆるさないことにあるのはいうまでもない。なぜなら、わたくしたちの知識の多くは教科書を重要な情報源にしているからである(非日常生活であればあるほど)。そうした現実をふまえつつも、社会科教育研究には、子どもたちに侵略と植民地支配をいかに伝え、どうしたらその学習が被教育者の未来に生きる力に転化しうるかという課題が重くのしかかっていると思う。教科書の在り方・教科書の叙述の在り方・授業構成等の問題はそこからとらえ直されていく必要があると思う。それは教科書の文言をちょっと変えればすむという問題ではないだろう。わたくしたち社会科教育に携わる者の視座のありようが問われていると思う。日韓の歴史教科書会議に参加しながらわたくしたちがしきりに考えたことは、侵略と植民地支配の過去に社会科教育研究者としていかに立ち向かうかとういことでしかなかった。その想いをあえて言葉にすれば、人間の尊厳や人権を尊重する感性と認識(想像力)の重要性という抽象的な言葉でしかない。その言葉をこれから映すVTRでおぎなっていただければ幸いである。

\* 横浜国立大学教育学部

# アジア理解を深めるための社会科学習

— 朝鮮史の学習を例として —

中尾 敏朗\*

生徒のアジア観の特色とその学習の方向性について、歴史的分野の側から検討をしてきている。今回はそれを朝鮮史の学習に代表させた。若干加筆して発表の要旨としたい。

生徒の朝鮮観には、相反する二面が同居的に潜んでいる気がする。

A) 歴史的に結びつきの深さ、その文化的伝統の高さ、互いの友好関係の大切さなど、協調の方向。

B) 近代における支配対象、日本の経済的優位への自負心とその保持願望など、反発の方向。

たとえば古代部分では、渡来人のもたらした文物が優れていたことはよく知っているが、その渡来の要因として、日本への「帰化」や日本兵による「連行」をイメージする者が多い。また、渡来人が日本人（の祖先）だと認識している生徒はごく少ない。

近代部分では、大半の生徒が朝鮮に対する植民地支配の事実を厳しく非難し憎悪しているが、一方植民地支配による市場獲得と収奪とが、近代日本の経済発展の前提条件だったと認識すると、先の「道義的」非難は途端に動揺し始める。隣国との友好は尊重したいが、自国の繁栄は損ねたくない。この二面の矛盾に引き裂かれてしまうのである。互いに議論を重ねていく果てには、「当時は弱肉強食の時代だから仕方なかった、私たちの時代は友好を実現していく」という論調が支配的になりもする。だが、この「過去絶縁型」の認識では、歴史が与える重たい課題に答えたことはなすまい。多民族の不幸や損失の上にこそ自国の発展を見るのは、決して過去だけことではあるまい。

「国際協調の精神」を育てるためには、協調を強調する形の順接的な授業だけではおそらく不十分だろう。それによって自分自身が払うことになる犠牲や損失との引き合い関係をよく認識し、それを勇敢に乗り越えてこそ、現実の国際関係の中の困難な状況を克服する力が育つのではなかろうか。

---

\* 筑波大学附属中学校

〈研究会報告〉

## 第34回 例会 報告

1994年10月22日(土)に、本会の第34回例会が筑波大学学校教育部において開催された。例会では佐藤俊彦先生に実践報告、澁澤文隆先生に講演をしていただいた。以下お二人にご寄稿いただいた要旨を掲載する。

### 「私立中学・高等学校における地理教育の一貫性」

— 新学力観をふまえて —

佐藤俊彦\*

本校では6年一貫教育を実施し、教育の一貫性について各教科レベルで配慮しやすい環境にある。こうした中での課題は、生徒の発達段階についてどこまで配慮する必要があるかという点、もう一つは、内容が重複する場合、興味・関心が薄らいでしまうのではないかと、とういことであつた。

一つ目の課題を考えるために、地形図学習を例とした。この場合、中学校でも高校でも、断面図を書くといった、図上で作業する内容はほとんど変わらない。作業自体は中1でも可能である。異なっている点はその考察の範囲である。つまり、基礎となる作業は同様に行っても、そこから何を分らせるのかという、内容的深まりについては高校段階にゆずるという形を取っている。実際、高校生の方が他教科や生活経験上身につけてきた知識をもとに、総合的な考察を行うことができる。また、内容の一貫性について、プレートテクトニクスを例として挙げた。私の場合、中1でも高校でも、プルームの考え方にまで触れて説くようにしている。できるだけ簡単に解説しており、中1の試験でも基本的に理解していることは確認できた。こうしてみると、社会科の場合、発達段階の考察というのは能力的な配慮という面より、特に既存知識・体験の差というのが関係しており、教えられた知識が自分のものとしてどの様に総合的に理解され、身に付くのが自ずと変化するように思われる。無理に平易にして、表面だけで学習を終えるよりは、主題学習などにより、その年齢で可能な限り、考察させることが大切なことではないかと考えている。

二つ目の問題も、関心や興味を重視する新学力観においては大きな課題である。高校の地理で特別に変わった内容構成をしているのではないため、中学段階でのアプローチの仕方を工夫している。社会科全体として教科課程を見直し、地理の内容を日本と世界に分け、日本地理で主観的なアプローチにしている。また、世界の内容は中学の世界史的内容と融合させて、地域の全体像がつかめるように配慮している。内容の重複について、現実には、何年も前に習ったことは忘れてしまっていたりして、繰り返しの効果の意味あいが強い。しかし、新聞記事を利用して、事象がどう変わりつつあるのか、また、これまでの体験や学習を通して、理解がどう広まったのかを考査させる事も重要である。既存の知識を揺さぶるような授業展開を配慮する必要がある。

\* 麻布中学校・高等学校

# 社会科の課題と改革の方向

— 中学校・高等学校の当面の課題をめぐって —

澁澤文隆\*

中学校・高等学校の社会科（地理歴史科、公民科）をめぐる課題はたくさんあるが、それらの中で本日は受験指導とのかかわりに焦点化して述べることにする。というのは、各地の先生方にお会いすると、新しい学力観に立つ社会科授業はタテマエ、理想の世界であり、ホンネ、現実には受験指導に対応した社会科授業を推進せざるを得ないとの声がよく聞かれるからである。このため、入試が変わらなければ学校の社会科授業は変わらないし、網羅的な知識詰め込みの学習になってもやむを得ないとの授業観が横行している。

こうした状況下においては、どんな優れた実践や提案も、結局は“入試はどうなるのか、入試に対応できるのか”といった問いにかき消され、授業改善にまで至らない。それだけに、特に中学校社会科においては大部分の生徒が高校進学を希望しているだけに、受験指導の在り方を視野に入れた社会科授業の検討が必要になっている。

ところで、多くの先生方は受験指導というと“知識詰め込みの授業”と考え、このため課題学習や作業的、体験的な学習などを効率の悪い学習ととらえる傾向がみられる。しかし、それは受験指導を矮小化しているのではないだろうか。なぜならば、塾や予備校によっては、受験指導といっても知識詰め込みでない授業も散見されるし、参考書に書いてあるようなことは予備校で教えてもらわなくても自宅で勉強した方が効率が良いと言う予備校生の声も聞かれる。

社会科の授業は、受験を意識して網羅的に取り上げれば取り上げるほど、毎時間新しい内容に入るような繰り返しの少ない学習になりやすい。そして、人間の能力では知識といえども1回ではなかなか覚えられないということを考慮すると、次から次へと新しい内容を取り上げる授業は、一方で次から次へと忘れさせる一過性の授業とすることができる。にもかかわらず生徒が知識を身に付けることができるのは、実は授業以外の場で、すなわち家庭や塾などで繰り返しの勉強をしているからである。このように考えると、受験勉強は学校の授業だけで成り立っているわけではなく、家庭などでの学習との一体化の中でとらえる必要があることがわかる。

そして、もし学校で知識詰め込みの指導を行ったら、生徒自身でそうした知識に肉付けしたり、問いと答えの間にあることを埋めたりすることは困難であることから、生徒は家庭等でも知識詰め込みの学習を繰り返さざるを得なくなる。そうした文字と言葉で問いと答えを短絡的に結び付けたような知識は、忘れやすく応用性がないなどから身に付け方の質が悪く、このためより一層覚える勉強を繰り返さざるを得ない。このような学習が、たとえ受験勉強であっても効率的なのだろうか。

学校の授業と家庭等の学習との一体の中で受験勉強が成り立っているとすれば、学校の授業と家庭等の学習とは同じレベルの知識詰め込みの学習を繰り返すのではなく、学校の授業と家庭等の学習で役割分担をして、全体として生きた知識をしっかりと身に付けた方が効率的なのではない

\* 文部省

か。知識の身に付け方をはじめ家庭での勉強の仕方をしっかり指導する一方で、学校は学校でないといけない学習、いわばひからびた知識に血を通わせるような学習、知識を身に付けるためにも必要な見方や考え方の学習などを分担して、その充実に努める。実は、前述の塾や予備校などでは、既にこの観点に立って受験指導の充実に努めているのである。このように考えると、“受験指導＝知識の詰め込み”ではなく、もっと豊かな受験指導の実現が可能であるし、新しい学力観に立つ社会科授業と受験指導とは両立できるといえよう。

なお、豊かな受験指導を展開するには、一方でテスト改革も必要である。これまでのようなテストは知識を問うものなど矮小化してとらえ、覚えていないと解けない、覚えているだけで解けるような問題のみを出題する状態から脱却する必要がある。そして、社会科の授業で重視して指導した部分をもっと大切にしたり、関係認識の学習成果を問うような問題を工夫したり、変化の時代に対応する能力に着目して問うような問題を開発したりして、いわば覚えているだけでは解けない問題を多く出題できるよう努力する必要がある。

さらに、今日では、受験指導というフィルターをかけないと何が重要で何が重要でないかを区別することができないような社会科担当の先生が多くなっているように思われる。また、授業は知識詰め込みの受験指導で工夫改善の余地が少ないと割り切り、エネルギーの多くを部活動などに注いでいる先生も少なくない。こうした状況を踏まえると、教員の研修を整備、充実することも課題になっていると考える。